

垂水史談会報

第54号
2024(令和6)年
1月発行

【報告】

「島津氏久逆修塔」周辺を草刈り作業

水之上地区公民館有志

令和5年12月17日(日)、水之上地区公民館では有志を募って、垂水史指定文化財である「島津氏久逆修塔」周辺の竹や草を刈り取り、通路がきれいに整備されました。

逆修塔とは説明版にある通り「大きな戦いに臨む時、武将たちが死を覚悟して、石塔を建てて武運長久と死後の供養を祈願した」ものです。

正平10(一二五五)年島津氏久が大隅の肝付兼重や楡井頼仲らを討つために垂水を通じた時に建てられたと言われ、当時を知る貴重な文化財です。



氏久の逆修塔は宝篋印塔で、周りには家臣の石塔が60余基ありますが、逆修塔はイノシシなど野生動物によって、掘り荒らされているため、今後修復作業が必要と思われると思います。

【お知らせ】

1月28日(日) 13:30~垂水市民館
日本遺産「薩摩の武士が生きた町」
「もっと垂水の魅力を知る講演会」

「垂水麓の魅力とその歴史」(仮題)

原口泉(志學館大学教授/鹿児島大学名誉教授)

*総合司会…東川隆太郎
*垂水史談会共催(入場無料)

【垂水市史料集(一)】より

西南之役 私学校生徒の従軍譚 ⑩

—立山健氏への聞き書き— (山口栄之 筆記)

遂に捕虜となる

明くれば八月十八日(新の九月二十四日)、いよいよ総攻撃が開始された。銃声はもちろん砲声も次第に激しくなってきた。自分等は敵に近い所には心細いから、山の味方と一緒にしろうと思つて、二之丸の内から逃げ出して照国神社の西の道から彼の峻坂を登ることであった。この時の戦友はみな酒に酔っていたように記憶する。谷山の人が三人、鹿児島島の人が四人、自分



を合わせて八人であった。

やや登って行くと意外、上の方から鎮台兵が鉄砲を撃ちかけた。いつの間にか占領していたものと、びっくりして立ち止まったが、うまい具合にそこに岩陰があったから、さっそく皆々そこに隠れた。しばらくして出ようと思つて顔を出してみると、やはり鎮台兵が筒先を向けて構えている。上へは書くの如くして行かれず、下へ逃げて後ろから撃たれそうに空しくそこに縮まっているのであった。しかし、いつまでもこうしていられる訳のものではない。最早や万事休したことを感得した自分は、思い切つて帯を解き、それをうち振りながら「降伏、降伏」と呼ばわって走り出た。そしたら鎮台兵が左右から飛びかかって来て後ろ手に縛つて仕舞った。他の人々も続いて来るので、「同時に来ると撃つぞ、一人一人出て来い」と言つて一人づつ縛つた。そして上の方に曳かれて行つた。

即ち頂上のやや平らな所に出たが、立派な士官たちが椅子に腰掛けていた。その前で一応取り調べを受けたのである。特に刀を調べて見つめた一人の士官が上官に向かって「こいつを貰って斬ってみたいのですが」と言って、指した者は谷山の人で肥えてすこぶる見事な体格であった。「生命惜しさに、せつかく俘虜になったものを、やはりここで斬られるのか」と、情けなさを嘆ずる色が皆の顔に浮かんだ。しかるにさすがは上官である。「今日はたくさん斬らねばならぬ日じゃ、こんな俘虜などを斬るのは止しなさい」と言ったので、一同ホッとした事である。

他にも俘虜があったが、それ等と共に草牟田の方へ曳いて行かれ、さらにまた武や騎射場に転送され、午後、上荒田に着いてそこで食事を許された。しかし何も食いたくなかった。

ここには早や数十人の捕虜が来ていた。そして吾々と同時に降伏した樺山資治という人に姓名を認めてもらって差し出した。この官軍は大阪鎮台であった。

捕虜の不謹慎

三日目には数珠つなぎになって、礮へ回されてその鋳造場の倉の二階に押し込められた。ここには既に四、五百人の大勢となっていた。

ある日のことである。それは礮、島津邸で陸海軍大集会が催された時、我々が例の倉の二階から窓越しに見ていると、真下の道路を立派な士官たちがあるいは馬上で、あるいは徒歩でゾロゾロと通って行くのであった。するとこちらから声をあげて、「あれが七左じゃ、あれが七二じゃ」と、野津兄弟を見つけて怒鳴りたて、遂には握り飯を投げた者もあった。すると、それに倣って、この窓、あの窓から雨の降るように握り飯の礮が投下された。

かくて立派な金モールのついた軍服の肩から背中へべたべたと打ち付けられたのである。

ああ、何たる乱暴であろう。野津兄弟は今立派な将校である。それに対してこの無礼は許し難いことである。しかも自分たちは自由を奪われた囚われの身でありながら、こんな不謹慎なことを致すとは誠にもって言語道断、必ず重い処罰があるものと思つたが、あに凶らんやで、ただその窓を密閉して、あたかも炎暑の候、蒸し返さるるような苦しみを嘗めさせられたのみであった。

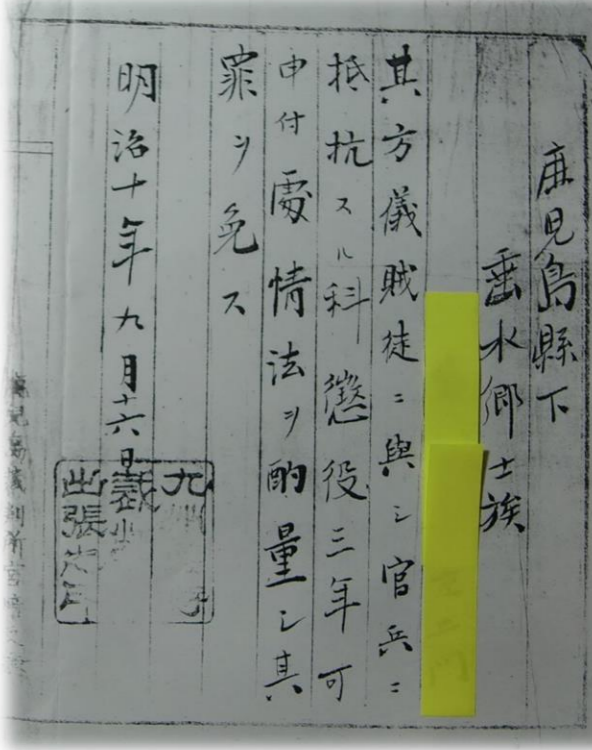
釈放する

一週間目には自宅謹慎ということになって、倉の中から放ち出された。垂水の人で同じ運命にあつた東伝左衛門、川上八の両氏と祇園之洲まで来て素麵を一杯ずつ食つた。自分が金を五十銭持っていたから、この代はそれだ払った。

この時、東氏は女羽織を着ておられ可笑しな風であったが、どうした訳であつたか、今から考えてみて不思議である。



町は焼野が原と なつてい るから泊 まる家も あるま い、いか がしたも のかと思 案の末、 垂水に漢 学の先生 来てお



られた篠原先生が頭に浮かんだ。「ひとつ行って相談してみようではないか」と評議一決して、すなわち菓子を買って手土産として持つて行った。幸い先生在宅で、「これはよろこそ参られた」と愛想よく迎えられるは嬉しかった。

然るに、ここは官軍の宿所になっていて、表座敷では士官たちが酒を飲んでいようであった。それと知った東、川上の両氏はたちまち憂鬱な顔色になられた。

暫くすると表座敷から、来いと言われたので、スワこそと両氏は逡巡（尻込み）して出るのを拒まれた。然るに自分は「エケイあるもんナ」と言って出て行った。この時、自分は彼の県庁で分捕った軍医服を着ていたのである。それを後で思い出すたびに可笑しくてたまらない。けれどもその時は士官たちの目が別段見咎めもせず、快く迎えて盃を差したりご馳走を与えたり、そして「戦争はいかがであったか」などと聞いたり話したりして面白かった。

よい加減に引き下がって別室に導かれ、そこで久し振りに娑婆の夢を結ぶことになった。他の両氏はいっこう安眠が出来ぬ様子であったが、とうとう夜の明けぬ内に姿を隠された。

自分はひとり先生の宅を辞して横岸木に来てみると、彼の両氏はその他の人々と共に、早や垂水船に乗り込んでおられた。

さきに郷里を出発する時は勇ましかったが、肥、豊、日、隅の野に転戦し、風雨八か月の艱難（かんなん）を経て何等報いらるものなく、空しく故山を望んで、さびしい帰途に着くのである。敗軍の恨み感無量。しかし、死して還らぬものよりは遙か幾十倍の幸福と言わねばなるまい。生きて帰った姿を見る親たちの目には喜びの涙がいつぱいであった。

―たるみず春秋―

高速の見ゆる病室寒卵

岩元るみ子

寒卵は冬の季語である。寒中の卵は特に滋養に富み、体を健康に保つと言われている。

この作品は、作者が入院中している病室の窓から車の疾走する高速道路が見えているのであろう。

この間からベッドに起き上がって食事も摂れる様になった。お見舞いに頂いた卵を手のひらに乗せて力を貰おう。寒卵と高速の現代的な取り合わせが上手い。

(季語：寒卵・冬)

(文章：瀬角龍平)